

3412 貝殻と灯台：状況と心模様②

当時、ポルトガル人が、日本をめざすのは大変だったと思う。
苦難の連続であったのではないか。それを思えば、現在の私の旅は、実に単純。
英語は片言。ホテルでは通用するかも知れない。

人並みに、不安一杯の旅立ちだったが、期待感もある。好奇心が勝った。
ポルトガル語の辞書は持参。何とか伝えないと次に進めない。
まさに珍道中。ボディランゲージと、知恵と機転。

私には、人懐っこい側面がある。男三兄弟の末っ子、次兄とは5歳、長男とは10歳違った。
国籍も、年齢も、男女も関係なし。人懐っこさが身を助ける事に。
冷静に、客観的に見れば、何とも滑稽だが、
何となく伝わり、これが面白い体験になり、積み重なって行く。

食べ物は、隣の人が食べているものや、ジェスチャーで、
恥の文化で育てられた私には勇気のいる事。迷惑はかけないようにという^{まくぼ}気配りはある。
旅の恥はかき捨てという思いはない。

日本人としてのプライド。人が見ていなくてもやる事をやる。
梨花の下に冠を正さず。祖母の教育のおかげである。人種や国が違っても通じるものがある。
昨今の海外からの観光客だけでなく、一部の日本人も…

しかし、訪問国の状況が、ある程度わかるまでは不安がある。
知識からではなく、体感して納得する。
ポルトガルは、素朴な比較的 안전한農業国という思いはあった。先入観禁物。

私の旅のスタイルでは、訪問国で、まず市場を探し、訪ねる。

買い物客の集まる市場は、経験上、比較的安全である。

その国の人が、どんなものを食べているのか、食べ物からの推理が面白い。

自分の楽しみでもある。

しかし、慣れるまでが大変である。緊張感が持続する間、街に溶け込むことを心がける。

気疲れすると、人が居ない場所をめざす。

そうした背景があって、この灯台に来た。

道中、近づくと貝殻が一杯、貝殻の地の上に灯台がつくられている。

そこに波が参加。静と動、面白い光景になって来た。

感性や直感が働き出した。興味津々、行ける所まで。

打ち寄せる波も、最初はほとんどなく、静かだった。時間とともに、様相が変わってきた。

船の航行に欠かせないのが灯台、実に有難い道標。

灯台から見る船、船から見る灯台、船旅には夢とロマンがある。

地の果てにある灯台を見るのが大好きである。

幼少の頃、見た映画、灯台を守る夫婦の話が思い浮かんだ。

灯台のある地の独特の雰囲気、大好きである。

大人になった今、企業戦士を経ての現在。雑踏よりも、やすらぎを感じる場所がいい。

ひとり、夢にふける絶好の場所である。

この日は、沖ゆく船もなかった。

幼少の頃、孤独な体験があり、夢想を描く癖がある。ロマンティックな、
夢みたいな事ばかり、理想ばかり言っていると人から笑われたりした夢見る夢少年だったが、
現実が厳しかったので、潜在意識になっていたようだ。

だから、こうして解放されると、堰を切ったようにやるのかも…
これがなんとも心楽しい。いたずら心。時には困るものの、大人になった今も健在。
それが海外に行くとはじける。何しろ、ひとり旅。

灯台の下の赤茶けた地肌。貝殻が混じっている。並の数ではない。
昔は海底だったのか、推理するのが何とも楽しい。
少し足が滑った。崩れ落ちはしないだろう。それでも慎重に、怖々、行ける所まで。
危険という意識より、強い好奇心。どのように見えるのか？
貝殻の埋まった地層、不思議な印象。

ふと、よくこんな遠くまで来たものだ、という思いが脳裏に。
そんな予測や選択肢はなかった。
走馬灯のように、いろいろな事が思い浮かんだ。

今少し、勉強しておけばと反省している事に、お茶事がある。ほのかな香り、一輪の茶花、
しんしんと湯が静かな音を奏でる風炉。
そして、床の間には時を経た一幅の書。「鳥啼きて山さらに幽かなりホトトギス」

山の静けさが充ちるとき、その静寂はさらに深まる。一つの音の介入で、いっそう 深まる。
科学的合理主義では理解されない、別次元の真理であり、
霊性があり、東洋的「無」「非日常性」の世界。

今もって私には苦手であるが、その心をもっと深く、奥まで知っていれば、
もっと何かを感じられたかもしれない。後悔はないが、
元には戻れない。出来る時に、できる事を、フットワークよく実践。
もしかしたら、今、なんとなく、雰囲気を知っていたことが、役立っているのでは…